

万吉だより

MA GECHI NEWS

第12号 平成22(2010)年3月

立正大学の板碑研究

平成21年度の特展として、「題目板碑の世界」を企画した。題目板碑は日蓮宗に特有の題目、「南無妙法蓮華經」を刻んだ板碑である。板碑は中世に盛行した石製供養塔婆であり、現状では熊谷市域に嘉禄3(1227)年の紀年銘を有する最古資料が所在している。板状節理の特性により容易に板石を確保できる緑泥片岩が秩父地域に産出することによって、武蔵北部を中心として広く関東地方に展開しており、その数は7～8万基とされる。

上部の尖った縦長の板状石材の表面上部に、信仰の対象である主尊の像容、ないしは主尊を表す梵字種子を刻んでおり、信仰した仏教宗派の違いを反映している。立正大学の淵源としての日蓮宗に特有な板碑は、「南無妙法蓮華經」の題目を刻んだ題目板碑であり、宗祖日蓮上人の入滅後に採用されている。板碑には供養の契機と対象者の法名、儀礼執行者の名前なども刻まれており、石に刻まれた文書として中世史研究の貴重な資料となっている。

立正大学の考古学は、仏教系大学としての誇りに基づいて仏教考古学を標榜してきた。石田茂作博士に師事された故久保常晴博士による板碑・仏具研究、坂詰秀一博士による板碑・伽藍・墳墓研究などであり、両博士の薫陶を受けた同窓生による研究も数多い。久保常晴博士はまた板碑などの金石文などに認められる、特定の地域・時期に確認できる私年号をまとめて『日本私年号の研究』を学位論文とされている。

立正大学博物館が所蔵する多くの板碑資料は、久保博士の蒐集にかかるものであり、埼玉県・東京都・千葉県からの資料であり、宗派に特有の題目板碑を主体としている。緑泥片岩製の板碑資料は、鎌倉時代末期の14世紀代初頭以降16世紀代に及ぶものである。

久保博士の蒐集された半世紀前の当時、板碑は文化財としての認識も低く、本来の所在地から遊離していたものと考えられる。近年確認される板碑資料は、多くは発掘調査による出土資料であり、墓地遺跡などから出土している。

これら新資料を含めて既往の資料を総合的に検討する方向が実践されており、板碑造作の微細な様相を明確にして型式、分布範囲などを特定し、信仰の実際に迫る研究が継続されている。

館長 池上 悟

大原遺跡出土遺物

平成 21 年 9 月に中島宏氏（埼玉県立歴史と民俗の博物館）より、吉田格コレクションの一つである大原遺跡（埼玉県川口市吉岡安行所在・第 2 展示室吉田格コレクションに一部展示）の遺物について再調査の依頼を受けました。大原遺跡は、吉田格氏（大正 9 年～平成 18 年）によって昭和 15 年 10 月に調査が行われ、「埼玉縣大原遺蹟調査報告」（『古代文化』第 12 卷第 2 号 日本古代文化学会 昭和 16 年）として報告されています。

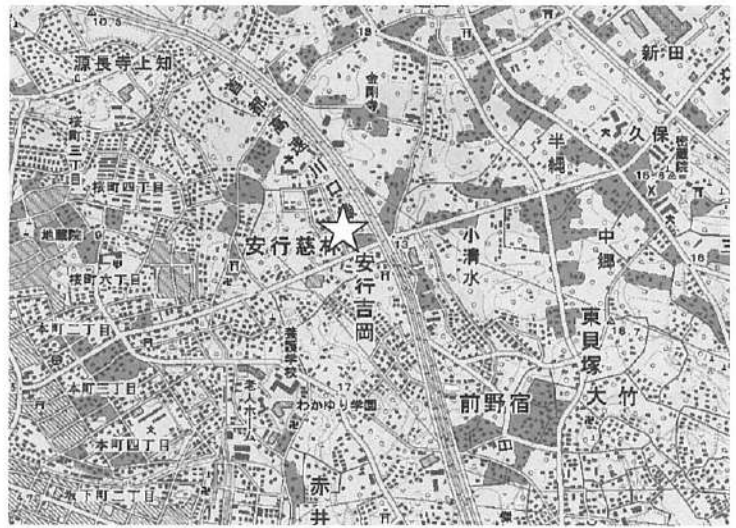
大原遺跡は、埼玉県の南東部に位置する川口市大字安行吉岡に所在します。標高 15m のところで、調査当時は畑地と山林でしたが、現在は大部分が宅地となっています（第 1 図）。

立正大学博物館所蔵の大原遺跡出土遺物は、縄文時代早・前期の土器の破片資料で 32 点あり、今回はその資料紹介をします。

全資料 32 点のうち、吉田格氏が報告した資料と合致したものは 6 点（第 2 図 1～4・6・7、吉田格氏報告第 4 図 No. 1・3・15・16・21・25）のみでした。他 26 点は未発表資料です。このうち図化した資料は 17 点（第 2 図、写真 1）で、以下に概要を説明します。

1～5 は押型文土器と呼ばれる土器群です。押型文は、文様を彫刻した棒状の施文具を回転させて文様を表わしたものです。1・3 は山形文といわれるジグザグの小さな山形が連続した文様が施されています。2 は格子目文と呼ばれる小さな菱形上の文様が施されています。山形文のある土器の中には、内部にも文様を施すものがあります。

6 は第 2 類撚糸文系土器（稲荷台式土器）と呼ばれる土器群で、底部近くの破片です。撚糸文とは、撚った細い縄を棒状の軸に巻き付けて回転させて文様を作ったものです。稲荷台式土器とは、関東地方を中心とする撚糸文系土器群の一つです。東京都板橋区稲荷台遺跡の出土資料をもとに白崎高保が昭和 16（1941）年に設定した標式土器です。撚糸文系土器群は、関東を中心に分布し、井草式・大丸式→夏島式→稲荷台式→花輪台式・



第 1 図 大原遺跡位置図

稲荷原式・大浦山式という編年が組まれています。

7～13 は第 3 類沈線文系土器と呼ばれる土器群です。沈線文とは、木・竹・骨・貝殻などの施文具を使用して土器表面上に凹んだ線で文様を表わしたものです。本資料は、横方向に平行して沈線文が施され、その間に斜めに斜格子状に沈線文が施されています。

14 は三戸式土器に伴うと考えられる無文土器と呼ばれる土器です。三戸式土器とは、神奈川県三浦市三戸遺跡で採集された資料の中で沈線文施文の土器に対して、無文土器を対象として赤星直忠によって昭和 4（1929）年に設定された標式土器です。

15・16 は田戸下層式土器です。田戸下層式とは、神奈川県横須賀市田戸遺跡の出土資料をその層位の違いから、上層と下層に分けて山内清男が昭和 7（1932）年に設定した標式土器です。

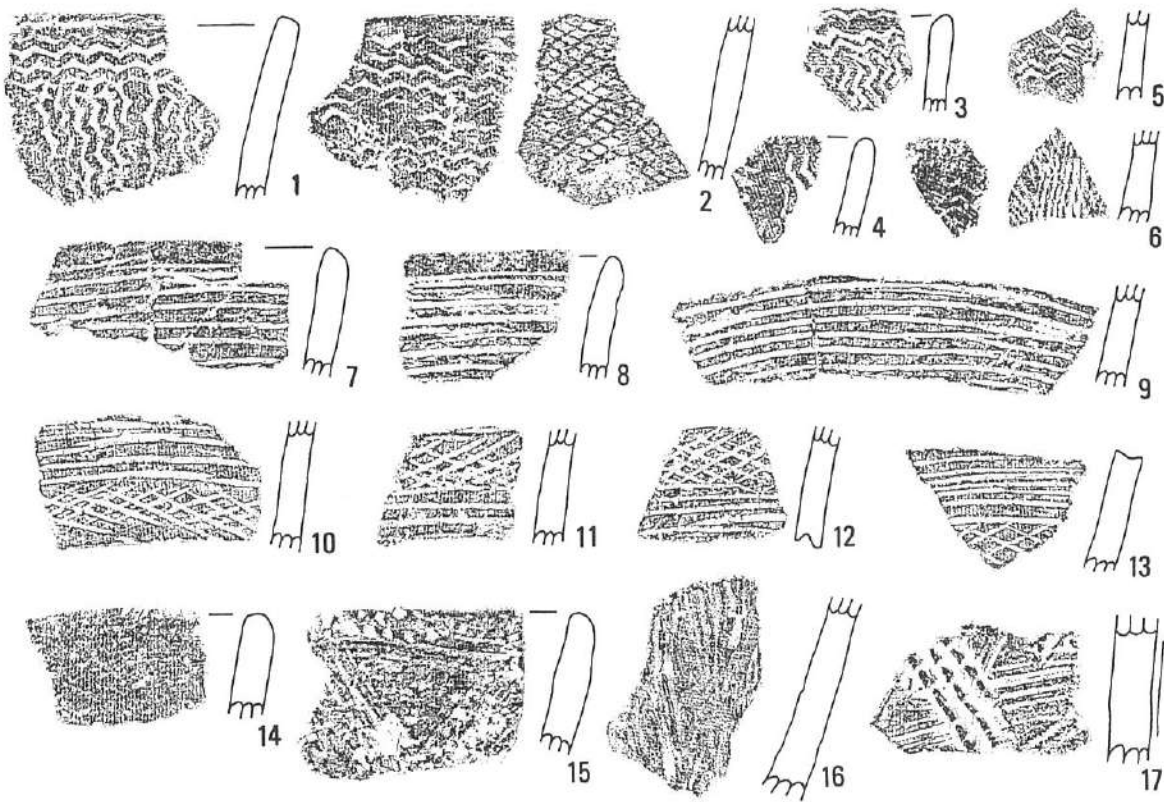
17 は第 5 類土器です。沈線文が施されたところに 3 条の結節浮線文と呼ばれる竹管状施文具を使った文様が施されています。

この大原遺跡の調査は、埼玉県で撚糸文系土器と押型文土器および沈線文系土器が初めて確認された遺跡であり、その後の大宮台地における縄文時代早期の研究の指標となる学史的に重要な遺跡となるものです。

なお詳細な報告は、『立正大学博物館年報』8 に掲載しています。

※図版は中島宏氏に作成して頂きました。また、本文解説にあたりご教示頂いた。

（博物館学芸員 内田勇樹）



第 2 図 大原遺跡出土遺物実測図 (S=1/2)

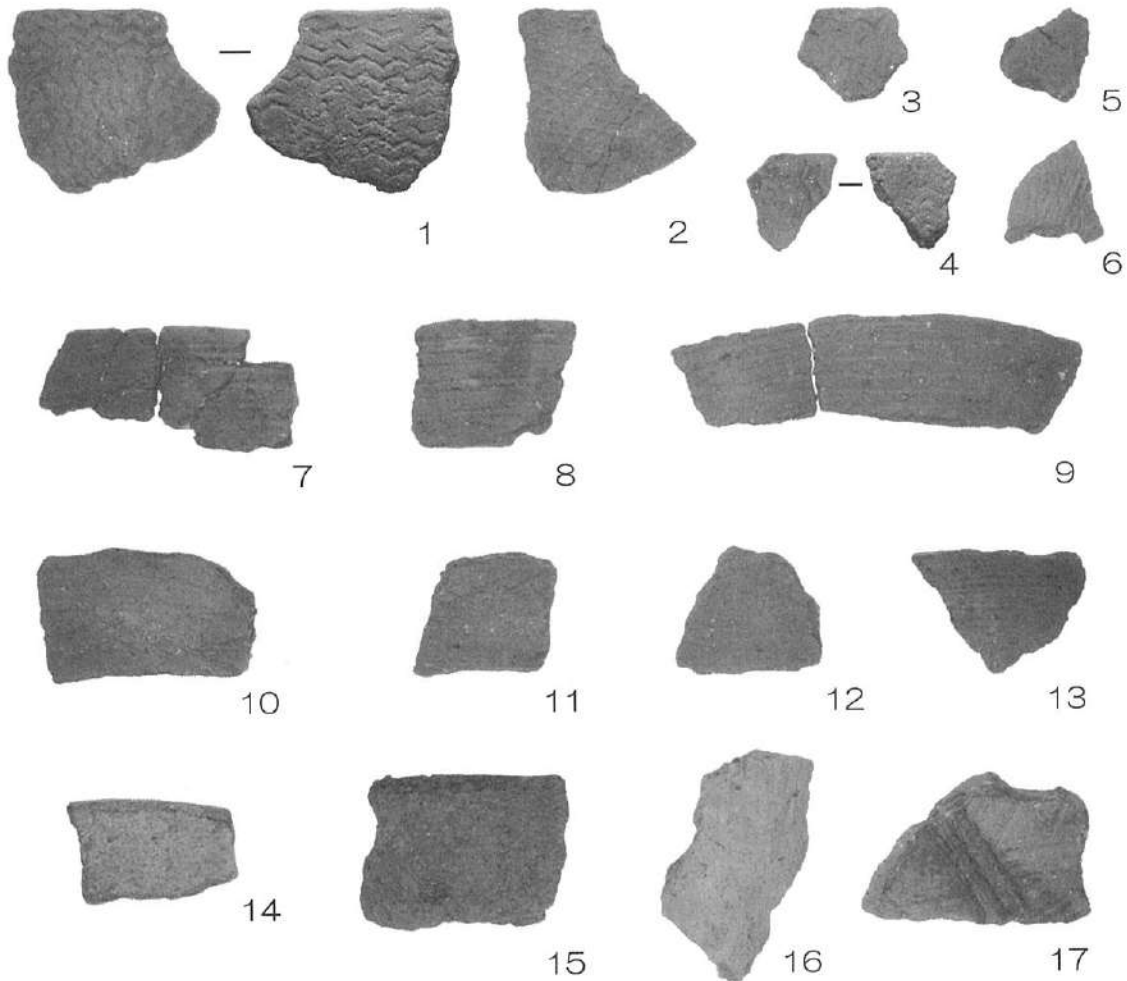


写真 1 大原遺跡出土遺物

平成 21 年度第 6 回特別展 題目板碑の世界

平成21年11月1日(日)～30日(月)にかけて、第6回特別展「題目板碑の世界」を開催しました。

立正大学博物館では、題目板碑を28基所蔵しています。今回の展示ではそのうち紀年銘が明確である11基を展示し、合わせて熊谷周辺の題目板碑で著名な妙昌寺(東松山市神戸)所蔵題目板碑を拓本により16点を紹介しました。

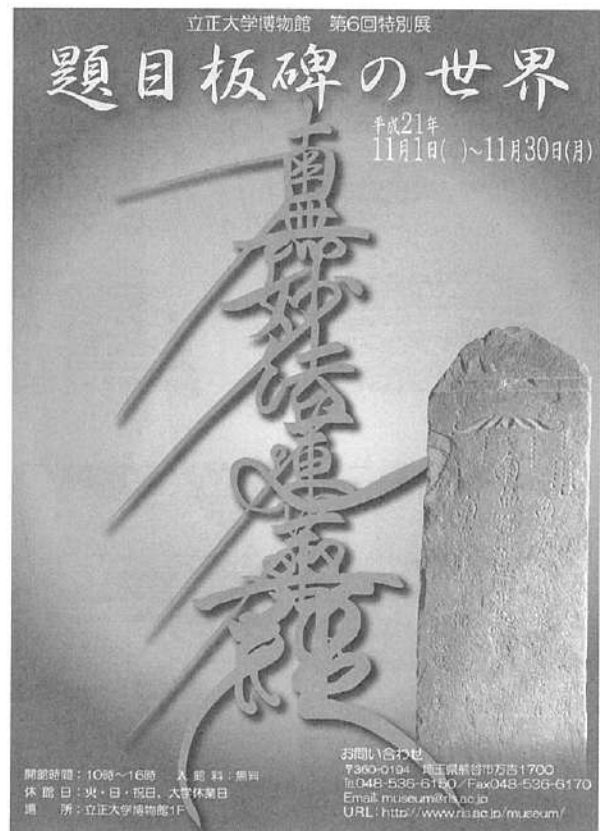
板碑は中世に供養塔として造立された石製塔婆の一つです。紀年銘が残るもので最も古いとされる板碑は、埼玉県熊谷市に所在する阿弥陀三尊の像容が表された嘉禄3(1227)年の板碑です。熊谷周辺にはこの他にも数多くの板碑が分布しています。

このように、中世に入って多くの板碑が造立されていく中で、特に日蓮宗に特有の「南無妙法蓮華経」の七字題目を刻んだものを題目板碑と呼んでいます。立正大学では、歴史考古学の主要な研究課題として、久保常晴(「下総型題目板碑考」「題目板碑の研究」)や坂詰秀一(「板碑の総合研究」)、阪田正一(『題目板碑とその周辺』)三氏などにより、題目板碑の研究が行われてきました。また、各地でも立正大学同窓によって題目板碑の研究が取り組まれています。

今回展示した立正大学所蔵の題目板碑のなかで最も古いものは、徳治3(1308)年銘の板碑です(写真1)。真ん中に「南妙法蓮華経」と刻まれ、その両脇に「南無多寶如来/南無釈迦牟尼佛」とあります。また、その下には偈頌といわれるお経の一文が刻まれています。

題目板碑は、その形態から一遍主題式(「南無妙法蓮華経」のみを刻む)、主題両尊式(題目の両脇に二尊(「多寶如来」「釈迦牟尼仏」)を刻む)、曼荼羅式の三種に大別されます。博物館所蔵の題目板碑は、1基が曼荼羅式で(写真2)その他は主題両尊式です。年代は、徳治3(1308)年から永禄4(1561)年までのものです。

この他に、妙昌寺(東松山市神戸)の協力を得て、



第6回特別展チラシ



写真1



写真2

妙昌寺所蔵題目板碑 16 基を拓本で展示しました。妙昌寺所蔵の題目板碑はこれまでも多くの研究材料として取り上げられてきました。妙昌寺所蔵の板碑の分類は、一遍主題式が 1 基、主題両尊式が 11 基、曼荼羅式が 4 基になります。

一番古い板碑は、貞和 2 (1346) 年銘の主題両尊式のもので、宗祖 65 回忌に日願上人と 26 人の信徒によって造立されたものです (写真 3)。大きさは高さ 159.0cm、幅 40.0cm、厚さ 6.0cm の大きな板碑です。次に大きな板碑で、天文 24 (1555) 年銘の主題両尊式のものがあります。これは中ほどで折れてしまっていますが、復元すると推定高さ 157.0cm の大きさになります。また、この板碑は題目の下部に「奉読誦大乘妙典一千部成就」と刻まれ、46 名の信徒と日嚴、日通の名前が見られます。このような板碑は、妙昌寺から北西約 15km のところに所在する大霊神社にもあります。

埼玉県の題目板碑の分布状況についてみると、1351 年～1400 年にかけて、板碑造立が著しく増加する時と同じく県内全域に造立されていきます。その他は、主に白子川流域 (戸田市など) に多く分布します。これは、中山法華経寺の有力檀越である千葉氏との関連から赤塚郷を中心とする白子川流域の千葉氏所領に日蓮宗が広がったことと関連します。この他には、今回取り上げた東松山市や東秩父村、騎西町・菖蒲町などに集中して分布が見られます。

今回の企画展では、日蓮宗の信仰と深く関わりながら造立されてきた題目板碑について、立正大学所蔵の題目板碑とともに紹介することができました。

また、企画展にともない、11 月 21 日 (土) に熊谷校舎において磯野治司氏 (北本市教育委員会)、12 月 2 日 (土) に大崎校舎において阪田正一氏 (文学部特任教授) に講演会を行って頂きました。

また、12 月 2 日 (水) ～22 日 (火) において大崎校舎でパネルによる移動展示を行いました。

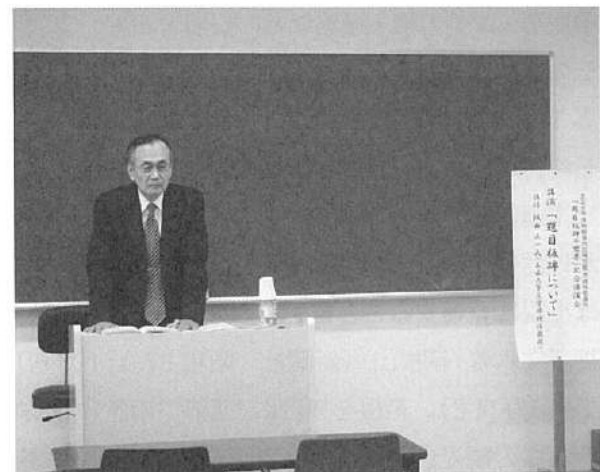
(内田勇樹 立正大学博物館学芸員)



展示会場の様子



磯野治司氏講演の様子



阪田正一氏講演の様子

展示資料の紹介

朝日遺跡出土石器と小説『箱根山』

第1展示室の立正大学文学部考古学研究室資料展示コーナーに、朝日遺跡出土の石器が展示されています。

朝日遺跡は、神奈川県足柄下郡箱根町芦ノ湯に所在する遺跡です。遺跡は、標高880mの丘陵上部に位置し、芦ノ湖東岸にある駒ヶ岳の東麓を通る国道1号線沿いに点々と認められます。東北に丸山(959m)、南に二子山(1,091m)、西北に宝蔵山(1,066m)・駒が岳(1,327m)、東に鷹巣山(837m)を望みます。丘陵の西側縁辺には、阿字ヶ池湿原地が広がります。調査地点は、遺跡のうちの一つである、石器が発見された地点に沿って5mに限って行われました。

遺跡の調査は、昭和36(1961)年11月16日～19日までの4日間で、芦刈研究会と立正大学文学部考古学研究室の共同で行われました(調査に至る経緯などは、『万吉だより』創刊号(平成15年3月刊行)を参照)。遺物はナイフ形・切出し形・船底形・彫刻刀形・搔器などの石器と石刃、その他に石核の破片が出土しています(写真1)。石材は、遺跡近くで産出する黒曜石を使用し、1点玄武岩製のものがあります。

本遺跡は、神奈川県で初めて旧石器時代の遺物が確認されたことで著名ですが、もう一つは小説に登場することでも有名です。その小説は、獅子文六著『箱根山』(新潮社 昭和37年1月刊)です(写真2)。箱根を舞台に“西郊”“南急”“北条”の3つの観光会社の抗争と老舗旅館の“玉屋”“若松屋”の争いが描かれていきます。旅館同士の争いの中で、若松屋の娘明日子と玉屋の雇い人乙夫の恋愛物語もあり、面白く物語が進みます。小説の主人公である若松屋の幸右衛門は、民俗学や考古学に通じていて、自身が生まれ育った“芦刈”



写真1 朝日遺跡出土遺物



図1 朝日遺跡位置図

に縄文時代より古い時代から“アス民族”がいたという自説から研究を進めていました。そして物語も終盤になってきたところに、乙夫が拾ったという2点の石を手にし、これは間違いなく旧石器の遺物であると確信し、出土地を確かめに行きローム層から石器を見つけ出すことになります。

この小説は、当時「箱根山戦争」ともいわれた観光会社の争いを痛烈に風刺したことで話題になりました。

当時、朝日新聞に連載していた『箱根山』は、この小説が終焉に近づくなかで、石器発見の事実が本当であったことを読者に知らせるために、昭

和36年10月6日の学芸欄に「1～2万年前の石器―“箱根山”の舞台で―」と紹介しました。これらの詳細は、坂詰秀一著『私の考古遍歴』(雄

山閣 平成18年3月刊)に掲載されています。(博物館学芸員 内田勇樹)



写真2 獅子文六『箱根山』(新潮社 昭和38年1月5刷)の箱表紙

彼は部屋着の単衣に、細帯という姿だったが、着がえをする間も惜しく、下駄をつっかけた。もともと、尻ハシヨリをするには、忘れなかった。外へ出ると、かなり、強い風だった。青空に、低い雲が飛び、木々の梢は、サッサッと、音を立てていた。野分の前駆の箱根の山風だった。明日子は国道沿いから、父親を案内した。赤い土が、濃淡の層をなして、崖となるところから、朝日ヶ丘へ登りかけた。「フーム……」

幸右衛門は崖の途中で、腕組みをした。宝の山を目前にしても、実をいうと、彼は、まだ、半信半疑だった。あんな太古の遺品が、地上に露出していたということが、不可解だったからだ。しかし、彼は、玉屋善兵衛が、宮ノ下から湖畔へ、新道を開き、それを拡張整備して、一号国道が建設された時に、この朝日ヶ丘の土を、大きく切りとったことを、思い出した。しかも、それから、数度の台風で、この崖が削りとりられ、最近では、六月の集中豪雨で、多量の土を、洗い流したことに、思い当った。

――そうか。大自然と日本政府が、力を併せて、遺跡の

発掘工事を手伝ってくれたのか。彼は、はじめて合点した。勇気が百倍して、なおも、崖を登ると、「パパ、この辺よ」明日子が、地面を指さした。彼の眼が、皿になり、赤く血走った。ローム層といわれる、赤土の層の上を、所々に生えている夏草の根をわけて、彼の指が、走り廻った。「あったー!」彼は、大きな声をあげて、小さな石列を、抬い上げた。「あったー!」「あったー!」石列や、尖頭器や、石斧まで、無数に、地上に顔を出していた。こんなことが、あつていいのか。夢でなければ、こんな欲張り爺さんが、路上に散乱する金貨を拾うように、彼は、何ごとも、忘れて、手を動かした。

237 幸福の石

写真3 『箱根山』に出てくる旧石器の発見のくだけ

NEWS

来館者数

平成21年10月1日(木)～平成22年3月31日(水)

来館者数

10月85人、11月396人、12月152人、1月40人、2月22人、3月15人
計710人

出版物

平成21年度下半期は、下記の刊行物を発行しました。

- ・第6回特別展図録『題目板碑の世界』7号(平成21年4月刊)
- ・館報『万吉だより』第11号(平成21年10月刊)

団体見学

- 5月：武蔵野文化協会
- 6月：成徳深谷高等学校
- 7月：埼玉県立飯能高等学校
- 11月：埼玉県立桶川西高等学校
さいたま生きがい大学

- ・館蔵資料「基礎文献」叢刊第5輯『浮島・前浦遺跡、原古墳群発掘調査報告書』(平成22年3月刊)

見学者の声

立正大学博物館では、来館者の皆様の意見を反映するためメッセージ箱を備えております。下記のご意見は多数寄せられたものから事務局で集約したものです。貴重なご意見、ありがとうございました。今後の博物館運営に役立させていきたいと思っております。

- ・第6回特別展「題目板碑の世界」を見学しました。題目で書かれた板碑が沢山ありすごかったです。
(県内・本学学生・19歳男性)
- ・特別展を見に来ました。板碑のイメージが梵字だけだったので、題目で書かれているのに驚きました。
(県内・本学学生・20歳女性)
- ・非常にたくさんの実物資料が展示してあり良かったです。復元鐘の音色も非常に綺麗でした。
(県外・大学生・19歳男性)

- ・妙昌寺の板碑が拓本で見れたので良かったです。
(県内・一般・30歳女性)
- ・鐘がこんなにも多くあることに驚きました。様々な形で面白かったです。
(県内・一般・30歳男性)
- ・様々な資料が展示してありましたが、他の自然関係の資料などもあるかと思っていました。
(県外・一般・40代女性)
- ・第6回特別展を見学に来ました。題目板碑について良くわかりました。これからも特色ある展示を行って下さい。
(県外・一般・60代男性)

利用案内

所在地： 〒360 - 0161
埼玉県熊谷市万吉1700
立正大学熊谷キャンパス内
TEL 048-536-6150
FAX 048-536-6170
開館日： 月・水・木・金・土曜日
(大学休業中を除く)
開館時間： 10:00~16:00
*火・日・祝日、及び大学休業中(夏・冬・春期休暇等)
に開館を希望する人は、事前に博物館あるいは

総務部総務課(048-536-6010)にご連絡ください。

交通機関：・JR高崎線(上野から55分)、上越・長野新幹線(上野から35分)、「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス(国際バス)で約10分。
・東武東上線(池袋から56分)「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス(国際バス)で約12分。

あ と が き

今号では、吉田格コレクションの一つである大原遺跡出土遺物の紹介をしました。紹介にあたって中島宏氏(埼玉県立歴史と民俗の博物館)に調査を行って頂き、ご教示頂きました。お忙しい中誠にありがとうございました。また、第6回特別展では「題目板碑の世界」として立正大学所蔵の題目板碑の紹介を行いました。

これからも博物館に収蔵されている多くの資料を出来るだけ公開していけるように努力していきたいと思っております。

(内田)

立正大学博物館館報 万吉だより 第12号
平成22(2010)年3月31日 発行
編集・発行 立正大学博物館
〒360 - 0161 埼玉県熊谷市万吉1700
TEL 048-536-6150
FAX 048-536-6170
e-mail: museum@ris.ac.jp
http://www.ris.ac.jp/museum/index

題字揮毫 田淵 観 斎 (立正大学名誉教授)

(印刷：光写真印刷株式会社)